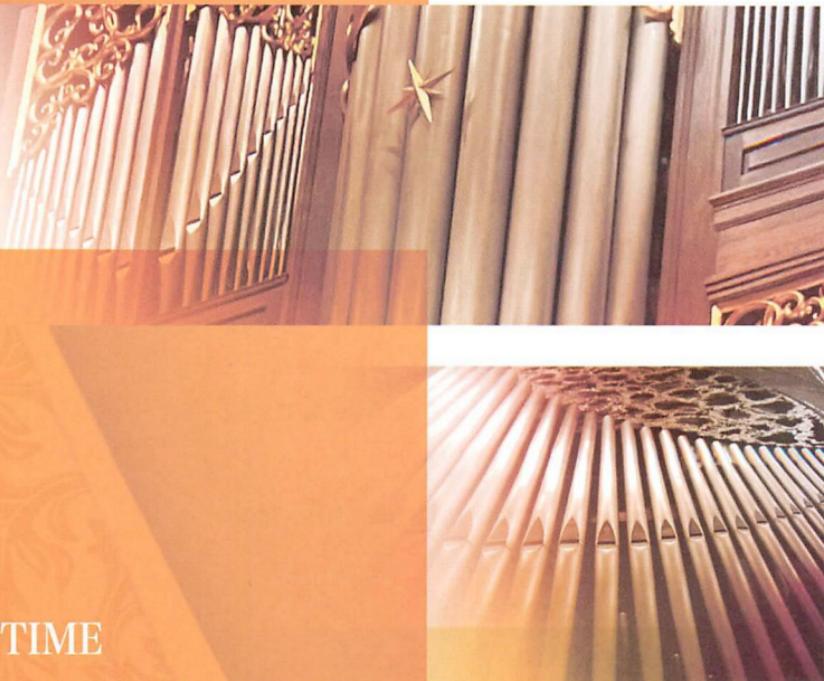


東京芸術劇場

260122

ランチタイム  
パイプオルガンコンサート  
Vol.159



LUNCHTIME  
ORGAN CONCERT 159

オルガン◎阿部 翠  
ABE Midori, Organ

2026.1.22 [木]

12:00開演 (11:00開場／12:45終演予定)

東京芸術劇場 コンサートホール

全席指定 1,000円

※未就学児入場不可。

※演奏中のご入退場及び、客席間のご移動はご遠慮願います。

東京  
芸術  
劇場

Tokyo  
Metropolitan  
Theatre

主催: 東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
後援: TOKYO MX

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会



© 原本史昭

## || オルガン◎阿部 翠 ABE Midori, Organ

東京藝術大学音楽学部楽理科、及びオルガン科卒。同大学院オルガン専攻修士課程修了。2018年より2年間、パリ地方音楽院に留学。オルガンを長谷川美保、廣野嗣雄、徳岡めぐみ、クリストフ・マントゥ、近藤岳各氏に師事。奏楽堂モーニングコンサートにおいて藝大フィルハーモニアと共に演。第49回日本オルガニスト協会新人演奏会出演。2023年度横浜みなとみらいホールオルガニスト・インターンシッププログラム第19期生。現在カトリック市川教会、碑文谷教会、田園調布教会、明治学院オルガニスト。

## アンケート

今後の劇場運営に関わる資料として活用させていただきますので、アンケートへのご協力をお願い致します。

お手持ちの携帯・スマートフォン等から右記QRコードを読み取り頂くか、下記URLのアンケートフォームよりご回答ください。

<https://forms.gle/Ao2mqkWTZNFA1XQc7>



# Program

バロックタイプオルガン使用 (A=415Hz バロック調律法)

J. S. バッハ(1685-1750)

Johann Sebastian Bach

## 前奏曲とフーガ ハ長調 BWV 547

Praeludium und Fuge C-Dur BWV 547

モダンタイプオルガン使用 (A=442Hz 平均律調律法)

A. ギルマン(1837-1911)

Alexandre Guilmant

## オルガン・ソナタ 第1番 Op. 42

Première sonate pour orgue Op. 42

第1楽章 序奏とアレグロ

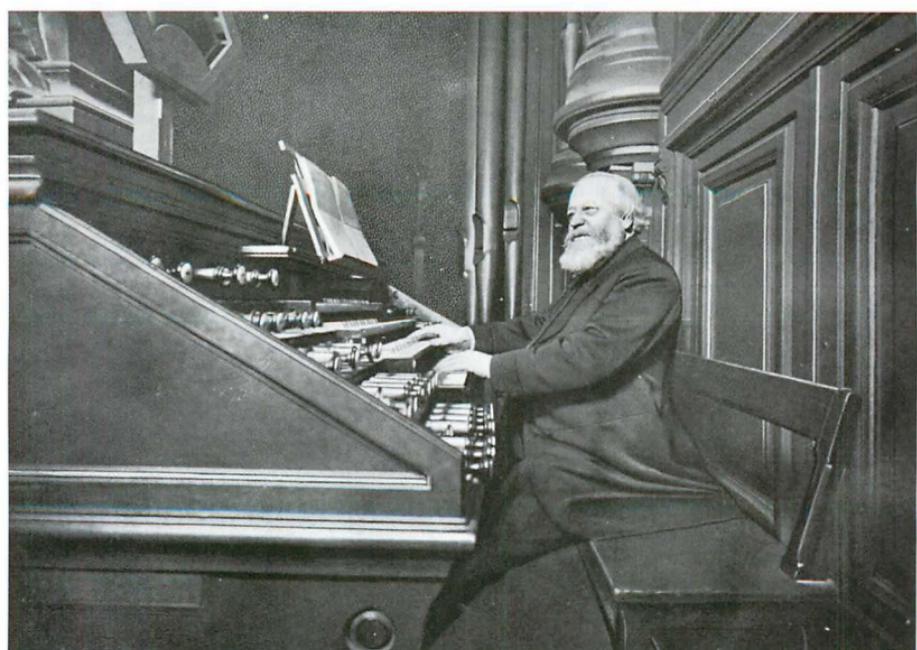
Introduction et Allegro

第2楽章 パストラル

Pastorale

第3楽章 終曲

Finale



パリ、トロカデロ宮殿のオルガンを演奏するギルマン



## バロック時代末期のオルガン音楽

おそらく1740年以降に作曲されたこのBWV 547は、バッハがオルガンのために書いた最後の「前奏曲とフーガ」かもしれない。この「前奏曲」と、公現祭（エピファニー、1月6日）のために書かれたカンタータ『彼らはみなシバより来たりて』BWV 65の冒頭合唱との間には、顕著な類似があることが多くの研究者によって指摘されている。公現祭は、キリスト誕生後に東方の三博士が幼子イエスを訪れたことを記念するキリスト教の祝日である。さらに、この作品のいくつかの部分には、バッハがクリスマスのコラールに基づいて書いた他のオルガン作品との関連もみられる。そこから、この作品がこの時期のために構想された可能性が高いと考えられている。舞曲的で協奏曲風の性格をもつ「前奏曲」に対して、「フーガ」はより簡潔で、極めて高度な対位法書法によって書かれている。主題は様々な形でほとんど絶えず用いられ、いわゆる“エピソード（嬉遊部と呼ばれる）”が少ないことも、晩年のバッハの探究をよく示している。

## 古典的ソナタ形式とロマン派オルガン音楽

今日ではやや忘れられた存在となっているものの、ギルマンは19世紀後半のフランスにおいて、最も精力的に活動したオルガニストの一人であった。1837年、フランス北部ブローニュ＝シュル＝メール Boulogne-sur-Mer に生まれ、数代にわたってオルガニストおよびオルガン製作者を輩出した家系に育った彼は、ごく自然な形で幼少期からピアノとオルガンを学んだ。父親からはオルガン製作の基礎も教えられ、1850年には父とともに、一段手鍵盤・足鍵盤付き、4ステップの小さなオルガンを自作している。この楽器は生涯手元に置かれたという。そして、オルガニストとしては極めて珍しいこの技術的素養により、後年ギルマンは新しいオルガン建造に助言者もしくは監督としてしばしば招かれることになった。

1860年、ギルマンはルーアン大聖堂で、ベルギーのオルガニスト、レメンス Jacques-Nicolas Lemmens (1823–1881) の演奏を聴く。彼は自らを“バッハの伝統の守護者”と称していた人物であり、その演奏に深く感銘を受けたギルマンは、ブリュッセルでレメンスに師事した。およそ1年間の修練の間に演奏技巧を飛躍的に向上させ、後に大きな武器となる即興演奏の能力も徹底的に鍛えられた。

フランスに戻ったギルマンは本格的に演奏活動を開始し、1862年のサン＝シュルピス教会、1868年のノートルダム大聖堂など、パリの重要な新オルガンの落成記念演奏会に次々と招かれた。1871年にはサントリニテ教会 Église de la Sainte-Trinité のオルガニストに就任し、その名声は瞬く間に国際的なものとなった。ドイツ、スペイン、イタリア、ハンガリー、スウェーデン、ロシアなどに招かれ、さらに演奏会では、ブクステフーデ、クープラン、ヘンデルといった古い時代の作品を積極的に取り上げることでも知られた。とりわけイギリスでの人気は高く、1890年にはウィンザー城でヴィクトリア女王の前で即興演奏を行っている。1893年、1898年、1904年に行われた3回のアメリカ演奏旅行（それぞれ約40回のリサイタル）は、彼の演奏家としての頂点であった。ギルマンは教育者としても重要な役割を果たし、パリ音楽院や、自ら創設に関

わったスコラ・カントルム Schola Cantorum で教鞭をとった。1899年にはパリ郊外の自宅に大きなオルガンを設置し、欧米各地から多くのオルガニストがプライベート・レッスンを受けるために訪れたという。

作曲家としてのギルマンは、主としてオルガンのために非常に多くの作品を残しているが、その内容は多様である。多くは当時のカトリック典礼のために書かれた実用的な作品である一方、演奏会用作品の中核をなすのが、1874年から1906年にかけて作曲された8つの『オルガン・ソナタ』である。口マン派の“オルガン・ソナタ”というジャンルは、1845年にメンデルスゾーン Felix Mendelssohn Bartholdy (1809-1847) が『6つのソナタ』Op. 65で確立し、コラールやフーガといった新古典的要素と、近代的な表現を見事に融合させた。その後リスト Franz Liszt (1811-1886) やフランク César Franck (1822-1890) が、当時のオルガンの拡張された音響的可能性を生かし、より大規模な形式を探求した。さらに1872年には、ヴィドール Charles-Marie Widor (1844-1937) が『オルガン交響曲』Op. 13の第1番～第4番を発表し、新しいジャンルを切り開いた。ギルマンの『ソナタ』も、まさにこの文脈の中で生まれたものである。ただし彼は、“交響曲”という名称は本来オーケストラのためのものだと考え、ピアノの場合と同様に“ソナタ”という呼称を用いることを好んだ。

「オルガン・ソナタ第1番 ニ短調」は、1874年、ブリュッセルのラーケン Laeken にあるノートルダム教会の新オルガン落成記念式のために作曲された作品である。この初演には、ベルギー国王レオポルド2世 Léopold II (1835-1909) も立ち会い、作品は彼に献呈された。しかし、この国王はかつて‘音楽とは、金のかかる騒音にすぎない’と言い放ったとも伝えられている。このソナタには、オルガンと管弦楽のために書かれた編曲版 (1879年) があり、「交響曲第1番」という曲名が与えられている。

3つの楽章には、いずれも“コラール的”な性格の主題、すなわち教会の讃美歌を思わせる素朴で歌いやすい旋律が用いられている。第1楽章「序奏とアレグロ」は、力強く莊重な「序奏」で始まり、鋭い付点リズムを用いた情熱的な曲想が印象的である。続いて「アレグロ」に入り、第1主題はまずペダルの独奏として提示され、その後カノン風の模倣によって展開していく。コラール風の第2主題は、フランクを思わせる穏やかな性格をもち、ひとときの安らぎをもたらす。2つの主題はその後、ソナタ形式の原理に従って発展的に扱われる。第2楽章「パストラル」では、牧歌的で優しい旋律が、まるでオーボエとクラリネットの対話のように歌われる。その流れの中に、ときおり遠くから聞こえてくるような柔らかなコラールの旋律が差し挟まれている。終楽章は、ギルマンの作品の中でも特に人気の高い楽章で、ネオ・バロック風のトッカータとして書かれている。急速な動きのパッセージに対して、莊厳なコラール主題が対置され、両者の緊張と融合ののち、作品は輝かしいファンファーレとともに二長調で華やかに締めくられる。

# 東京芸術劇場のパイプオルガン

東京芸術劇場のパイプオルガンは約9,000本のパイプから成る世界最大級の規模を誇り、また歴史上のいくつかの違うスタイルのオルガンを1つにまとめてみようという発想で設計された他に例をみない貴重な楽器です。背中合わせにオルガンケースが2つ作られ、第1の面はヨーロッパの伝統に沿ったデザイン、第2の面は当劇場コンサートホールとの調和を図った現代的なデザインとなり、2面のオルガンはコンピュータ制御により回転します。第1の面にはルネサンス様式とバロック様式という2台のオルガンがはめ込まれ、第2の面にはフランス古典期と19世紀フランス・ロマン派を中心に20世紀の音楽にも対応できるようにしたオルガンが入っています。オルガニストは弾こうとする曲に応じてオルガンを選び、音楽学の立場から最もオリジナルに近い演奏をすることが可能となっています。

マルク・ガルニエ社製／フランス



## 風導管(ダクト) ▶

モーターで作られた風がふいごで調圧され、パイプが立ち並ぶ風箱まで空気を届ける風の通り道。大きな風は木管ダクト、細かな部分は金管ダクトを使用して風が届けられる。

## Organ Stop List

### ルネサンス・オルガン[17世紀初頭・オランダ・ルネサンス タイプ]

a=467Hz 鉛パイプ使用。ミートーン調律法

HOOFDWERK—BORSTWERK—BOVENWERK C,D,E,F,G,A,B.....d'' (Kurze Oktaven)

PEDAAL C,D,E.....d' (Normale Oktave ohne Cis und Dis)

I. HOOFDWERK	II. BORSTWERK	III. BOVENWERK	PEDAAL	
1—BOURDON 16'	10—HOLPIJP 8'	17—SPEELFLUIT 8'	23—PREASTANT 16'	31—CYMBELSTER
2—PRAESTANT 8'	11—BLOCKFLUIT 4'	18—OCTAAV 4'	24—OCTAAV 8'	32—NACHTIGALL
3—QUINTADEEN 8'	12—QUINTFLUIT 1 1/2'	19—SUPEROCTAAV 2'	25—SUPEROCTAAV 4'	
4—OCTAAV 4'	13—REGAAL 16'	20—SEXQUALTERA 2 st.	26—MIXTUUR 2' 6 st.	
5—QUINT 3'	14—DULCIAAN 8'	21—VOX HUMANA 8'	27—BAZUIN 16'	
6—WOUDFLUIT 2'	15—SCHALMEI 4'	22—TREMULANT	28—TROMPET 8'	
7—MIXTUR 2' 6-12 st.	16—TREMULANT		29—CINK 2'	
8—TROMPET 8'			30—TREMULANT	
9—TREMULANT				

### バロック・オルガン[18世紀・中部ドイツ・バロック タイプ]

a=415Hz 鉛・錫パイプ使用。バロック調律法

HAUPTWERK—KLEINWERK—OBERWERK C.....f''

PEDAAL C.....f'

I. HAUPTWERK	II. KLEINWERK	III. OBERWERK	PEDAL	KOPPEL
1—PRINCIPAL 16'	12—GEDACKT 8'	21—ROHRPFEIFE 8'	28—PRASTANT 32' (tr.)	42—K.W./H.W.
2—PRAESTANT 8'	13—QUINTADENA 8'	22—BLOCKFLÖTE 4'	29—OCTAV 16' (tr.)	
3—ROHRFLÖTE 8'	14—PRAESTANT 4'	23—TRÄVERSO 4'	30—SUPEROCTAV 8' (tr.)	43—ZIMBELSTERN
4—OCTAV 4'	15—FLÖTE 4'	24—CORNET 3 f.	31—SUBBASS 16'	44—NACHTIGALL
5—SPITZPFEIFE 4'	16—SESQUALTERA 2 f.	25—QUINTLEIN 1 1/2'	32—ROHRFLÖTE 8'	
6—NASAT 3'	17—WALDFLÖTE 2'	26—REGAL 8'	33—PRINCIPAL 4'	
7—SUPEROCTAV 2'	18—MIXTURE 2' 5f.	27—TREMULANT	34—NACHTHORN 2'	
8—MIXTUR 1 1/2' 5-8 f.	19—KRUMMHORN 8'		35—MIXTUR 2' 5f.	
9—TROMPETE 8'	20—TREMULANT		36—CONTRAPOSAUNE 32'	
10—VOX HUMANA 8'			37—POSAUNE 16'	
11—TREMULANT			38—TROMPETE 8'	
			39—TROMPETE 4'	
			40—ZINK 2'	
			41—TREMULANT	

### モダン・オルガン[フランス・シンフォニック タイプ]

a=442Hz 鉛・錫パイプ使用。平均律に近い調律法

GRAND ORGUE—PETIT ORGUE—RECIT EXPRESSIF C.....a''

RECIT CLASSIQUE—ECHO CLASSIQUE C.....d''

PEDAAL C.....g'

I. GRAND ORGUE	II. PETIT ORGUE	III. RECIT EXPRESSIF	IV. RECIT CLASSIQUE	PEDAAL
1—MONTRÉ 16'	19—BOURDON 16'	33—COR DE NUIT 16'	48—BOURDON 8'	57—PRINCIPAL 32'
2—MONTRÉ 8'	20—DIAPASON 8'	34—FLÛTE DOUCE 8'	49—FLÛTE 4'	58—CONTREBASSE 16'
3—BOURDON 8'	21—FLÛTE TRAVERSIERE 8'	35—GAMBÉ 8'	50—CORNET 3 rgs.	59—SOUBASSE 16'
4—FLÛTE HARMONIQUE 8'	22—COR DE NUIT 8'	36—VOIX CELESTE 8'	51—TROMPETTE 8'	60—GROSSE FLÛTE 8'
5—GROS NAZARD 5 1/3'	23—PRESTANT 4'	37—FUGARA 4'	52—CLAIRON 4'	61—VIOLONCELLE 8'
6—PRESTANT 4'	24—FLÛTE DOUCE 4'	38—FLÛTE OCT. 4'	53—FLÛTE 8'	62—PRINCIPAL 4'
7—FLÛTE 4'	25—QUINTE 2 2/3'	39—OCTAVIN 2'	54—CORNET 5 rgs.	63—COR DE NUIT 4'
8—GROSSE TIERCE 3 1/5'	26—DOUBLETTÉ 2'	40—SESQUALTERA 2 rgs.	55—TROMPETTE 8'	64—CONTREBOMBARDE 32'
9—NAZARD 2 2/3'	27—TIERCE 1 3/5'	41—PLEIN-JEUX 3 rgs.	56—TREMBLANT	65—BOMBARDE 16'
10—DOBLETTÉ 2'	28—LARIGOT 1 1/3'	42—BASSON 16'		66—TROMPETTE 8'
11—TIERCE 1 3/5'	29—FOURNITURE 5 rgs.	43—TROMPETTE HARMONIQUE 8'		67—CLAIRON 4'
12—GRAND CORNET 5 rgs.	30—CLARINETTE 8'	44—HAUTBOIS 8'		
13—FOURNITURE 5 rgs.	31—CROMORNE 8'	45—CLAIRON HARMONIQUE 4'		
14—CYMBALE 4 rgs.	32—TREMBLANT	46—VOIX HUMAINE 8'		
15—TROMPETTE 8'		47—TREMBLANT		
16—CLAIRON 4'				
17—VOIX HUMAINE 8'				
18—TREMBLANT				
				ACCOUPLEMENTS
				68—P.O./G.O.
				69—R.E./G.O.
				70—R.E./P.O.
				71—G.O./P.E.D
				72—P.O./P.E.D
				73—R.E./P.E.D